

---

# ペルソナ4 ~ 迷いの先に光あれ ~

四季の夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペルソナ4〜迷いの先に光あれ〜

### 【Nコード】

N2842Z

### 【作者名】

四季の夢

### 【あらすじ】

影時間やタルタロス等の学園都市での闘いが終わったが一人の少年は眠りについてしまった。そして少年を守れ無かったと学園都市を去る一人の男。

それから二年、舞台は学園都市から一つの田舎町・稲羽市へと移る。そこで過去を背負い皆を守る為、瀬多洸夜の闘いが始まる

## プロローグ

？「ん？ここは？」

俺は気が付いたら見知らぬ場所にいた。車の中・・・見たいだな。そして椅子の真ん中に要る見覚えのある男と見覚えのない金髪の美女いた。

イ「ヒッヒッヒッ私はイゴールです覚えておりますかな？」

？「ああ、覚えてるに決まって要るだろ。俺にワイルドの力やペルソナについて教えてくれたのは他でもない、あんただ。」

そうこの男ーイーイゴールは二年前に世話になったんだ。そこでふつと隣を見てみる。

？「あんたは？」

俺は隣の美女に聞いてみる

？「お初にお目にかかります私はマーガレットと言います。以後おみ知りおきを」

？「ああよろしく、ところでエリザベスはどうしたんだ前までは彼女がここに」

イ「エリザベスは現在ここを出ております。ちなみにエリザベスは私の妹でもありますよ」

その言葉に俺は驚く

「妹！？それに出てるって何処に？」

そして今まで沈黙を守っていたイゴールが口を開く。

イ「エリザベスは彼を助ける方法を探すために現実の世界を回っておるのです」

・・・その言葉に俺は目を開く。

？「・・・彼って言うのはやはり。」

俺の言葉に静かに頷くイゴール。

イ「ええ。貴方と同じワイルドの力を持ち二年前に皆を救つ為に眠りについて仕舞ったあの彼です」

「・・・そうか」

その言葉に俺はイゴールから目を背ける。そんな俺にマーガレットが声をかける

マ「そんな顔をしないで下さい、あの子も定期的に連絡を寄越しているので心配なさらずに」

その言葉に俺は

?「いや違うんだ」

マ「えっ?」

?「俺はあいつが、ああなっただって知ってどうすればいいかわかんなくてな、卒業式が終わったらすぐにあの街を逃げ出したんだ。」

俺の言葉を静かに聞いてくれるイゴールとマーガレット。

「その事からずっと逃げていた俺に比べて、エリザベスはあれからずっと頑張ってたんだな。」

俺の言葉にイゴールは

イ「あれは仕方ない事だったので。あれは彼が自分で決めた事、貴方が自分を責める必要はありません」

イゴールの言葉に俺はただ己の情けなさしかなかったそんな時だった。

マ「それで貴方どうするのですか？」

？「えっ？」

マーガレットの言葉について聞き返す俺。

マ「このまま、何もしないままでもいいんですか？」

その言葉に俺は怒りを感じてしまった。

？「うるせえ！お前に何が分かる！・・・俺は逃げたんだぞ。その過去は消えないんだ」

俺はそう言つと、顔を下げる。

マ「でも、未来は変えれますよ。」

その言葉に俺は顔を上げた

マ「たしかに過去は決して変わりません。ですが未来は変わります。ここまで言えば、分かるでしょ」そう言ってくれたマーガレットの顔は何処か優しかった。

？「・・・そうだな、俺にも何か出来るかも知れないな、だが何をしようか？」

イ「実は今回貴方をお呼びしたのはまさにその事なのです」

その言葉に俺は表情が真面目になる。」

？「何かあるのか？」

イ「ゴールはゆっくりと頷く」

？「だが影時間もタルタロスも、もう無いんだぞ。」

イ「いえ、実は今度貴方様が行く町で事件が起きます」

「稲羽市で!？」

イ「ゴールは頷く」

確かに俺は両親が海外で仕事をするから、弟が叔父さんの家に行くことになり、ついでにお前も来いと言う事になり近々弟と一緒に稲羽市に行く事になったのである。

？「そこで俺に事件を解決して欲しいと」

イ「はい、それと実は貴方様の弟様にもお願いするつもりです」

イゴールの言葉に俺は驚く

？「総司を！？なぜだ？」

イ「それは、運命だからとしか言えません」

「そんな理由・・・はあ

そうだったな、あんたはそう言う人だった」

そう言った俺の言葉にイゴールは笑いながら答える。

「ヒツヒツヒツ理解が早くて助かります。」

そうイゴールが言った瞬間俺は視界が揺れた。

「どうやら、現実の貴方が目を覚ますようですね」



「・・・そうかイゴール、マーガレットありがとう」

「いえいえ、私は何も」

そう言ってヒッヒッヒッと笑うイゴール

マ「ふふふ、ではまた会いましょう・・・瀬多<sup>せた</sup>洗夜<sup>しんや</sup>様」

そう笑うマーガレット

洗夜「ああ！またな！」

そうやって笑顔で返す俺

あれ？そういえば俺マーガレットに名前乗っただけ？そう思いながら、俺は視界が暗くなった。

マ「ふふふ、本当エリザベスの言った通り自分一人で全部背負い込もうとして、それで何処と無く放って置けない人だったわ・・・またね洗夜」

洗夜が消えた場所でそう言うマーガレットの顔は何処か楽しそうだった。

イゴールからの呼び出しから数日がたった。

現在俺は、弟と一緒に稲羽市に向かう電車の中だ。

洸（稲羽市で一体何があるんだ・・・イゴールが俺に頼んだと言う事はペルソナやシャドウ関連か？それともあいつに関係が・・・）

だが、幾らか考えても予測しか立てられない俺は結局ため息しかでなかった。

洸「ハア・・・（こんな事ならあいつ等にも連絡すればよかったな、でも逃げ出した俺の事なんか相手にしてくれないか・・・だけど、あいつ等元気かな）」

とそんな事を思っていた時だった。

総「はっ！」

寝ていた俺の弟――瀬多総司が突然目を覚ました。

洸「おはよう、起きたか？」

総「・・・兄さん」

洸「なんかあったか？」

イゴールが干渉でもしたかな？あいつ夢の中で出て来るし。

総「いや、大丈夫なんでもない。」

洸「そうか、ならそろそろ降りる準備をしろ。間もなく着くぞ」

総「分かってるよ」

稲羽市が見えて来るのを確認して、そう言つと俺達は荷物をまとめて降りる準備をした。

洸「(さて、あの町で一体何が起こるんだろうな)」

## キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です

## キャラ紹介

瀬多 洸夜

《せた》 《こうや》

年齢：二十歳

外見：灰色の長髪、顔は上の下

使用武器：刀（片手剣）ペルソナ白書

ペルソナ：オシリス

能力：ワイルド・多重召喚（二体以上のペルソナ召喚）

趣味：剣術と料理

性格：家族と友達思いであるが一人で全て抱え混んでしまう。また優しさと厳しさを中立した性格で悪い時は自分だろうが他人だろうがキレル。

今作の主人公にしてペルソナ4の主人公の兄。

家から離れ一人で学園都市へ行き『私立月光館学園』の高等部に入学。

趣味でやっているだけあって、剣術はかなりの物。

それから、クラスが同じになった美鶴や明彦と友達になる。

そしてその夜の夢にイゴールが出て来て、色々と説明するがその時の洸夜は意味がわからず相手にしなかったが、次の日の夜に木刀で素振りの練習をしていた時に影時間に巻き込まれ、そして学園の場

所にあつたタルタロスに興味本位で侵入しシャドウと遭遇し異変に気付いた美鶴達と合流を果たしシャドウを撃退。(この時にペルソナ能力に覚醒)

そして美鶴達から事情を聞き、『特別課外活動部』に入部する。

武器の刀は美鶴から貰った物で世界に一つしかない、ある意味オールドメードな刀である。

それから3の主人公達が来た事により、皆のお兄さんの存在になり、ゆかり達からも信頼が厚かった。だが、自分の周りで敵味方なく、人が死に(千鳥は生存)目の前の命を守れ無かった自分を責めていた。

そして、自分達の卒業式が終わった後に3の主人公の状況を知り。

何も守れなかった自分に絶望し、3の主人公をどうすればいいかわからず、学園都市から逃げる様に去っていった。

その為、後日談は参加していない。

その後は家に帰りバイトや株又は近所の道場のお手伝いをしながら金を稼いでいた。

それから二年が経ち、イゴールとマーガレットの励ましにより自分にはまだ出来る事がある事を知り、巻き込まれる弟を守る事そしてまだ見ぬ事件解決の為に稲羽市へと向かう。

## 恋愛面

異性では美鶴との仲が一番良く。互いに意識していたが、互いに一

歩踏み出せず友達以上恋人未満の関係である。

主な使用ペルソナ

オシリス

物火氷風雷闇光

無――耐吸耐耐

洗夜が初めて出したペルソナで3の主人公とのコミュで姿が変わっている

姿は赤と白と黒の着物と甲冑を足して二で割った様な服に顔には龍の様な朱い仮面、背中には朱い翼そして右には大剣を持つ

風耐性

物理無効

ジオ系とムド系の技

そして数々物理技を持つ

攻撃型のペルソナ

ムラサキシキブ

物火氷風雷闇光

――耐吸耐耐吸吸

洗夜がイゴールの下で創ったペルソナ  
姿は青の長髪に白と桃色の着物を着て、周りには金色の羽衣があり。  
右手に本を持つている女性の姿をしたペルソナ

属性技

補助技

回復技

を多数持っているサポート型のペルソナ

この他にも多数のペルソナを使える。



霧の中の夢（前書き）

なんとか投稿です

## 霧の中の夢

洸「ふう座り過ぎて、尻がいたいな」

電車から降りて、俺が最初に言った言葉。座るのは楽だが、座り過ぎはだめだな

総「これから、どうすんだっけ？」

駅から出て辺りを見回す

総司

洸「叔父さんが迎えに来てくれる筈なんだが・・・」

俺も一緒に見回した時だった。

堂「おゝい、こっちだ！」

少し離れた所に叔父さん——堂島僚太郎とその娘さんの菜奈子が立っていた。

洸「いたいた！今行くよ」

叔父さんとは随分久しぶりだな。娘さんとは初対面だな。

堂「よ！二人とも写真よりハンサムだな。」

洸「ありがとよ叔父さん、そしてご無沙汰してます」

堂「本当に久しぶりだな。全く少し見ない間にでかくなりやがって」

洸「ならなかつたら問題でしょ。」

堂「はは！そりゃそうだ」

なんて世間話をしている。俺と叔父さん。そして挨拶する総司

総「初めまして」

そう言っ手を出す総司

「初めましてか・・・オムツを取り替えてやった事も有るんだかな」

そう言っ笑いながら握手に応じる堂島

堂「都会と違って退屈かもしれんが・・・」

洸「大丈夫だよ、それよりそろそろ自己紹介したいんだけど」

堂「ああそうだったな、ほら菜奈子」

そう言っつて堂島の後ろから顔を出す菜奈子ちゃん

総「初めまして、瀬多総司です」

総司に続いて挨拶する俺

洸「総司の兄の瀬多洸夜だよろしくな菜奈子ちゃん」

俺は出来るだけ笑顔で自己紹介をした。子供が怖がらせちゃ駄目だからな最初が肝心だ。

菜「・・・//」

顔を赤くして堂島さんの後ろに隠れる菜奈子ちゃん

・・・なぜだ？顔が怖かったのか？等とショックを受けている俺

総「兄さん・・・いい加減に顔がいいの自覚してよ」

洸「何！いやいや居たって普通だろう！」

モテた試しもないんだぞ？顔がよかったら彼女が何故出来ない！

総「・・・ハア〜」

あれくの果てに、ため息まで吐かれる始末だ。

そんな菜奈子ちゃんを見た堂島さんは

堂「ははは！なんだ？お前照れてんのか？」

菜「／／／／」

バチン！

と思いつ切り堂島の尻を叩く菜奈子ちゃん・・・あれは痛い

あれから現在、俺達は車の中にいる。俺は窓から景色を眺めていた。

菜「お父さん・・・」  
そんな中菜奈子ちゃんが堂島さんに話かける。足をもしもじさせながら

洸「（あゝトイレだな）」

堂「ん？トイレか？」

ドス！

そう言つと菜奈子ちゃんに横腹を殴られる堂島さん  
そりゃ怒るでしょ。

そして、近くのガソリンスタンドで車を止めて車から降りる俺達

店員「いらっしやませー！」

堂「ガソリン満タンで頼む」

店「はい、ありがとございますー！」

堂「ほら早くトイレ行っていい」

そう言つと菜奈子ちゃんはトイレに走って行く

店「トイレは左ね、左って分かる？お箸持たない方ね」

菜「菜奈子、子供じゃないよ。」

そう言つとトイレに走っていく

店「何処かお出かけで？」

堂「いやコイツ等が今日都会から来たんで迎えに行つてたんだ。ふ  
俺も一服してくるか」

そう言つとタバコを吸いに行く堂島

店「へへ君達、都会から来たんだ、ここ田舎だから何にもないっし  
よ」

泷「確かに何も無いが空気はいいな」

総「確かに」

て言うか仕事しなくて大丈夫か？すると店員が総司に目を向ける

店「それに見た所、君は高校生だよな。高校生ったら部活やバイトぐらいしか無いでしょ？今、内のスタンドバイト募集してんだ。よろしくね」

そう言うのと、店員は手を差し出す。遠回しにバイトの勧誘か・・・

総「よろしく」

その手を笑顔で握る総司

店「そっちのお兄さんも」

そう言うって俺にも手を差し出す店員。

洸「（断る理由もないし）ああ、よろしく」

そう言うって、俺も手を握り返す。

店「!?!?!?!君」



俺が手を握り反した途端  
店員の表情が変わる

洸「?・・・なんだ?」

店「・・・いや!何でもないよ」

店員と喋っていると、菜奈子が戻ってきた。

店「おっと、僕も仕事しないと」

そして、作業に取り掛かる店員、その時

総「ぐっ!」

洸「!?総司どうした?」

菜「具合わるいの?」

突然頭を抑える総司に心配する俺と菜奈子

総「・・・いや、大丈夫  
少し立ちくらみがしたただけだから」

堂「ん？どうした」

堂島さんも一服から帰ってきた。

菜「調子悪い見たい」

堂「長旅で疲れたんだろ。今日は家に着いたら飯食って早く休んだ方がいいな」

総「・・・すいません」

堂「そう他人行儀になるな短い期間だが、俺達は家族だ」

洸「そうだぞ。お前は少し遠慮しすぎだ」

堂「そう言う事だ。分かったら全員早く車に乗れ行くぞ」

こうして、俺達は堂島宅に向かう。

堂島宅に着いた俺達は現在夕食を取っていた。

スーパーの惣菜とかが、今日は仕方ないと思うがごみ箱を見て見ると、惣菜のパックのゴミばかりこれは、育ち盛りの菜奈子ちゃんにはマズイだろう。

後で総司と話し合いだな。

そして、何気なくテレビのニュースを観ていた俺達

ア「今日から明日に掛けて稲羽市は霧が濃くなるでしょう」

総「霧？」

何気なく呟いた総司

堂「ああ、このところずっと霧が出るんだ」

へへやっぱ温暖化が原因かもね。

P i P i P i

すると堂島さんの携帯が鳴る

堂「もしもし・・・ああ分かった今から行く・・・飲まなくて正解だったな」

そう行ってコートを持って出掛ける準備をする堂島

菜「お仕事？」

堂「ああ、帰りは遅くなりそうだから先に休んどいてくれ。洗夜、  
総司、戸締まりとか頼むぞ」

総「はい」

洗「了解」

そう言うと、出掛ける堂島警察だからね忙しいだろ。

菜「・・・」

まずい・・・空気が重いなこう言う時は。

洗「総司、後は頼む。」

総「え！？」

泷「お前は菜奈子ちゃんとは打ち解けて無いだろ。と言つ訳でお休み」

俺はそのまま2階の部屋（ちなみに総司の部屋は俺の向かいだ）に待避する後ろで総司がなんか言っているが知らん。

子供は一對一の方が喋り安いんだよ・・・多分。

そして、部屋に着いたら

そのまま布団に入る。

泷「今日は別に変わった事は無かったが・・・油断は出来ないな明日から少し引き締めないとな」

そう言つて眠りに着く俺

-----

泷「何処だここは？」

俺は部屋で眠っていた筈だったが、気付いたら周りが霧で覆われている空間にいた。

右手には影時間の時に使っていた刀そして、ポケットには銃の形をした召喚器

どちらも部屋に置いてる筈だからここに有るわけがないんだが・・・

泷「・・・」

俺は周りを警戒しながら、前にゆっくりと進んで行く

どれくらい歩いただろうか不思議な事にいくら歩いても疲れがない。  
そう思いながら進んで行くと目の前にはいつの間にか扉が在った。

泷「・・・行くしかないよな」

俺は自分に言い聞かせ、扉の先に進む。

泷「ここも同じか」

扉の先にも、霧に覆われた空間しか無かった。  
・・・その時

？「やあ良く来ましたね」

泷「!?!?・・・俺をここに呼んだのはお前か」

俺は霧の向こうにいるまだ見ぬ者に語りかけた。

？「そう、貴方には興味がありましたからね」

洸「そいつは、うれしいね誕生日でも教えてやろうか？」

？「いや、それはいいよ。私が興味有るのは貴方の力の方だからね。他の者達とは少し違う力を私は見てみたいんですよ」

こいつペルソナ能力について知っているのか。

それに口調からして俺とは初対面じゃないかもな。

洸「なんだったら俺の力、試してやろうか？」

？「ふふふ、貴方では私に触れる事すら出来ないでしょう」

？に見下した風に言われる俺。

ここまで言われたら、引き下がる訳にはいかないな。

洸「後悔すんなよ」

そう言うと俺は、召喚器を取り出し頭に突き付ける

？「そんな物が無くても、貴方は力を使えるでしょ。」

流「確かに使えるが、せつかくだからこれを使う事にするんだよ」

懐かしいなこの感覚。

それにこれも二年前の思い出の品だからな。

そう思い俺は引き金を引き叫ぶ。

流「オシリス！ムラサキシキブ！」

すると、朱い仮面を付けた大剣と翼を持つペルソナと周りに羽衣を浮かせて、本を持ち和服を着たペルソナが現れる。

？「・・・二体同時ですか」

流石に少しは驚いた様だなこればかりは、『あいつ』にも勝つてたし、だが同時召喚はかなり疲れたよな・・・だから早めに蹴りをつける！

流「いくぞ！まずは動きを止める！」



『マハラギオン！』

そう言つてムラサキシキブに技を出させながら、俺は？に刀を構えながら走り出す。巨大な炎は周りの霧を飲み込みながら、？を襲う

？「ぬうう・・・」

そしてオシリスで追撃！

オシリスの持つ大剣から斬撃を連続で繰り出す。

『木っ端微塵切り！』

？「ぐっ！」

洸「もらったああああ！」

そして俺は？に刀を抜刀しながら走り、？を切りかかった。・・・  
筈だった。

「（・・・手応えがない！？）」

どう言う事だ？確かに切った筈。  
等と考えている俺

？「ふふふ、だから言ったでしょう。いくらやっても無駄何ですよ」

洸「少しショックだな・・・！？」

なんだ？突然頭が・・・

？「どうやら、ここまでの様ですね」

その言葉と同時に周りの景色が歪んできた。

？「ではさよなら。貴方の行動を楽しませてもらいますよ」

洸「まで！お前は・・・一体・・・」

そう言いながら、俺の意識は途切れた。

――――

洸「はっ！・・・ここは」

辺りを見回すと、俺は自分の部屋にいた。

そして部屋の角に置いてある二年前から使っていた刀そして机には

召喚器、寝る前と何にも変わってなかった。

「ただの夢・・・じゃないよな。・・・イゴール、今回ばかりはかなりヤバそうな気がしてきた」俺の呟きは部屋の中へと消えた。

事件の幕開け（前書き）

今回は日常だけです

## 事件の幕開け

現在、俺はジュネスの家電コーナーにいる。

え？理由？いやだつて叔父さんは仕事だし総司は今日から学校、菜奈子ちゃんも学校つまり暇なんだ。

つて言うけど本音を言つと昨日の夢が気になったんだよ。

俺の勘が正しければ今日、この町で何か起こるだろう

洸「にしても・・・田舎だから商品は期待してい無かつたんだが、結構あるな」

新型の大型テレビに冷蔵庫その他諸々

洸「にしても買い過ぎたな・・・」

現在、俺の両手には食材等が入った買物袋で埋まっている。

インスタントだけじゃ栄養がなさすぎるからな。

家電コーナーに居るのは、ただ偶然だ。そんな事を思っていると

店「おめでとつございます！三等のゲーム機をどうぞ」

洸「ん？」

どうやら、福引きをやっている様だな。

一等の商品は新型のテレビが二台か、つまり一等は二つか。

店「あ！お客さんもどうですか？」

俺に気付いた店員が俺にも福引きを勧めてくる。

泷「はは、やりたいけど生憎、福引き券を持ってないんだよ」

店「大丈夫ですよ！お会計の値段で決まりますから。5000円で一回なのでお客様は・・・」

店員にレシートを渡す俺のレシートは10、250円つまり二回か。

店「お客さんは二回ですね」

そう言って箱を差し出す

店員、どうやら箱からクジを取るタイプの様だな

泷「んじゃ、お言葉に甘えて・・・」

そう言って、箱からクジを引く俺。さてさて何が出るかな俺は箱か

らクジを二つ選んで店員に渡す

店「はい！ではお客さんのは・・・え！すごい！一等ですよ！」

そう言つて驚く店員

つか！？マジで！やったじゃん！、周りからも祝いの言葉を貰う俺。

洗「でも、持つて行くの

大変だし住所を教えるから運んで貰うと助かるだけど」

店「はい！大丈夫ですよ

後もう一つのクジもみてみますね」

そう言えばクジを二つ引いたの忘れてた。

店「え」と・・・え！嘘！こんな事つて・・・」

突然、様子がおかしくなる店員。どうしたんだよ一体

洗「おい、どうしたんだ？」

店「その、このクジも・・・一等・・・です」

洗「・・・マジで？」

いや〜一生分の運を使ったかも知れないな。

ちなみに現在、俺は近所を散歩中だ。

あと当てたテレビは二台とも堂島宅に送ってもらった今日の夜に届く予定らしいって言うか田舎だからって早過ぎじゃないか・・・

そう言えば店員が泣いてたな完全に赤字だし。

そんな事を思っていると、何やら辺りが騒がしい。

すると前の辺りでパトカーが止まっている

洗「（なんだなんだ事件か？・・・ん？よく見ると総司と叔父さんもいるじゃん後見知らぬ美少女も）」

そう思いながら、総司達の元に行く

洗「よっ！総司、今帰りか！叔父さんも仕事ご苦労様」

？「え？誰この人なんかすっごい格好いいんですけど」

俺の言葉に緑のジャージを着た女子生徒が反応する

そして俺に気づく総司



総「ああ、この人は僕の兄さんなんだ」

？「え？お兄さん！？」

洸「そうだよ」総司の兄の瀬多洸夜だ。よろしく」

里「あつども私は瀬多君のクラスメイトの里仲ちえです。そしてこっちは」

里仲は隣にいる大人しい紅い制服を着た女子生徒に目を向ける。

天「天城雪子です・・・」

何処か病弱そうなイメージが尽きそうな子だな・・・それにしても二人とも、かなり美人だな。お前・・・転校初日で二人も口説くとは。

洸「美人を二人も・・・両手に花だな総司」

そう言って親指を立てる俺

里「天」「び、美人!？」

俺の台詞に二人とも顔が赤くなる。いや、初々しいね

総「兄さん・・・またそうやってからかって？」

洸「からかってないぞ!

美人に美人と言って何が悪い!」

里「天」「／／／／」

俺の台詞に更に顔が赤くなる二人

洸「全く、俺が入学した時は入学式当日にクラスにいた女子を口説いたぞ」

総「そんな事をするのは、兄さんだけだよ」

そんな俺の台詞に少し呆れ顔の総司

堂「って言うか、何でお前ここにいるんだ?」

今まで沈黙を守っていた。堂島が俺に話かける。

洸「散歩だよ。そっちこそ何かあったの？」

堂「一般人に教えられる訳無いだろ」

確かにでもこつちも、昨日の夢の事も有るしどんな事でも情報が欲しいからな、適当にカマでも掻けるか。

洸「と言つても殺人でしょ」

俺の台詞に堂島は表情が変わる。

堂「な！？お前何処でそれを聞いた！」

・・・殺人か

洸「いや適当に言っただけ何だけど・・・」

堂「あ！お前カマ掻けたな！・・・全く早く帰れよ」

洸「叔父さんもね今日、家に帰ったらいい物があるよ」

堂「なんだ？いい物って？」

洸「帰ってからの楽しみだよ」俺の言葉に頭が捻る堂島

堂「なんだかわからんが  
出来るだけ早めに帰るって菜奈子にも言っといてくれ・・・おい！  
足立いつまで吐いてやがる！いい加減にしろ！！」

そう言って近くで吐いている刑事を一喝する堂島

足「うぶっすいません堂島さん・・・」

洸「さて俺も帰るか総司も早く帰れよ、里仲さん天城さんもまたな」

里・天「え！あっはい！さよなら」

そう言って両手に買物袋を持ちながら帰る俺

・・・今回の事件ペルソナやシャドウが関係してるかは、現時点では何にも言えないな。だが・・・これだけは解るとんでもない事がこの町で起ころうとしている事だけはな。もう目の前で誰かを失ってたまるか。

そしてその夜、二台の新型テレビを見て堂島は驚き。菜奈子は喜び。総司は苦笑いしていた。

そしてテレビの内、一台は一階に、もう一台は俺の部屋に置く事になった。

## 目覚める力（前書き）

少し無理矢理かも知れませんか？

## 目覚める力

最初の殺人事件の被害者は山野真由美と言うアナウンサーだった。彼女は政治家の秘書である生田目太郎との不倫騒動である意味で時の人だった。そして、容疑者候補である生田目太郎とその妻、柊みすずにはアリバイがあり  
犯行は不可能とされており容疑者の目星は現在ついてないらしい。

洸「マヨナカテレビ？」

現在、俺は自分の部屋で  
総司から話を聞いていた

総「うん、深夜0時にテレビを見ると運命の人が見れるって友達に聞いたんだ」

あるよな、そんな都市伝説

洸「胡散臭いな・・・暇つぶし程度でしか試さないだろ普通」

総「う、うんそうだよな」

そう言いながら、何処か  
上の空な弟

洸「何か悩み事か？」

総「・・・いや悩みって程の物じゃないよ」

洸「いいから、話してみる伊達にお前より長く生きて無いぞ」

そう言つと総司は意をけした様に

総「兄さん・・・人って

テレビの中に入れると思う？」なんて事を聞いてきた

洸「・・・何？突然中二病発言してんのお前。慣れない環境で疲れ  
たか？」

流石の俺でも、そんな非現実的な事を言われると返事に困る。ペル  
ソナとかは別として

総「いや良いんだ。ごめん変な事聞いて、もう部屋に戻るよ」

そう言つて、部屋に戻る

総司



洗「・・・なんだったんだ？」

そう言うと俺は何気なく窓の外を見る

洗「・・・また霧が出ているのか」

そして時計を確認する

洗「(もうすぐ深夜0時か・・・マヨナカテレビー応確認してみるか)」

嫌な感じがした俺は、何故かマヨナカテレビが気になった。

そしてテレビの前に移動する。すると

ザ、ザザー---

洗「!?!?う、映った・・・」

砂嵐が少し収まりながら、段々と人影が映り出した。

洸「この服は確か・・・」

すると画面には女性らしき人が映った。だか、俺が気になったのは彼女の着ている服だった。

洸「（この服は総司の学校の女子生徒の制服だった筈偶然なのか？）

」

それに、この女子生徒も何処かで・・・何処だったかな・・・そんな事を思っている、ある事を思い出した。

総「テレビに入れると思う？」

洸「総司のあの言葉そしてマヨナカテレビ・・・」

イゴールは総司も今回の事件に巻き込まれるみたいなき事を見た。そして今考えれば、あいつは意味なき事をわざわざ口に出さない。つまり、総司・・・お前既に何かに巻き込まれてるな

となるとやる事は一つ

そう思い俺は、テレビに手を触れるすると

洗「ビンゴだな・・・」

手はテレビの中に飲み込まれていた。

洗「そうと、分かればテレビの中の探索は日が昇るを待ってからだ  
な」

そう言うと俺は布団に入り休む事にした。

洗「（それにしても、テレビに映っていたあの女子生徒は一体・・・  
）」

今はその意味がわからず眠りについてしまったが、洗夜がその意味を知るのは、すぐの事になる。

朝になり、叔父さんと総司は朝食をさつさと食べて、出掛けた。  
今、家に居るのはこれから学校に行くために朝食食べている菜々子  
ちゃんと俺だ

洗「菜々子ちゃん時間は  
まだ大丈夫だから焦らずに食べなよ」

菜「うん、ありがとうお兄ちゃん」

そんな風に笑顔で言う菜々子ちゃんを見て和んでいると・・・

ア「臨時ニュースをお伝えします。先日何者かに殺害された山野真由美さんの第一発見者だった小西早紀さんが今朝、遺体で発見されました」

そして映し出される写真を見て、俺は絶句した。

洸「な！？（この女子生徒はマヨナカテレビの）」

そつだ・・・思い出した。彼女は最初に殺害された

山野アナを最初に見つけた発見者として、この所メディアに取材を受けていた子だ。

菜「また、事件なの・・・」

そつ心配そつに言う菜々子ちゃんに俺は

洸「大丈夫だって！菜々子ちゃんには俺や総司そして叔父さんが着いてるから心配は要らないよ！菜々子ちゃんに何かあったらすぐに

駆け付ける・・・約束だ。」そう言って指切りをする　俺と菜々子ちゃん

菜「！・・・うん約束だよ！」

そう言って笑顔で指切りをする菜々子ちゃん。

それにしても、最初に死んだ山野アナはアンテナに吊されていて変死。

そして、その第一発見者で発見者である小西早紀さんが殺害された。それに、彼女はマヨナカテレビに映っていた。まさか・・・

洗「ねえ菜々子ちゃんマヨナカテレビって知ってる？」

菜「うん、知ってるよ菜々子のお友達も皆知ってるよ」

洗「もしかしてさ、今テレビに映ってた。山野アナもマヨナカテレビに映ってた？」

菜「菜々子は見えて無いけどお友達がそんな事言ってたよ」

やはり、となると鍵を握るのはマヨナ「あああああ！・・・！」

突然叫ぶ菜々子ちゃん

洸「ど！どうしたの！？」

菜「時間！菜々子、学校遅刻しちゃうよ！」

と、泣きそつに為りながら時計を指差す菜々子って！そんな呑気な事言ってる場合じゃねええ！

洸「マジ！仕方ねえ！菜々子ちゃんヘルメットかぶって俺のバイクのサイドカーに乗れ！」

菜「え！？いいの！」

洸「緊急事態だからいいの」

え？危ない？と言うかバイクいつ手に入れた？

細かい事は気にするな！

堂島さんには内緒だよ

キモい？余計なお世話だ！

菜々子ちゃんを何とか送ってから数時間後  
俺は現在、自分の部屋でテレビに入るための準備をしていた。  
右手には刀を挿し腰には召喚器。

洸「全く、テレビが当たって正解だったな」

このぐらいのサイズのテレビじゃなきゃ全身は入らないからな。  
そう言っていると俺は表情を引き締めてテレビの中に入る。

洸「さてさて鬼が出るか蛇が出るか、それとも・・・影が出るか」

-----

洸「ここがテレビの中か」

周りには霧と広い空間

洸「何がいるかこちらからじゃ分からない・・・なら」

俺は静かに集中しペルソナを呼ぶ。  
誰もいないところで、わざわざ召喚器を使う意味も無いしな。  
あれはあれで隙がでかい。

洸「ロスト！」

現れたのはボロボロの黒いマントを纏い、手には刃こぼれした鎌そ  
して顔は骨のペルソナが出て来た。

洸「ロスト、頼む」

俺がそう言うとロストは俺の周りに纏わり付く様にして消えた。

55

『ロスト』は戦闘向きの  
ペルソナでは無いが相手の能力を調べたり、ダンジョンや敵等の居  
場所を調べたりする事に能力が長けている。  
そしてロストにはジャミング能力があり、ロストがいる限り相手に  
居場所を悟られる事はない。

洸「これで安心だ、さて  
これから「キ・・・キミたち・・・何でまた来たクマ!？」ん？な  
んだ」

何処からか声が聞こえる



下の方からだな、どうやら下の方にも場所があるようだ。

？「へへへ・・・ちよつと眞実を掴みにね」

ん？あれは！？総司！それと見知らぬ男子たしか総司が言っていた、たしか花村つてヤツそれと・・・クマなのか？  
その時は俺はクマ？の台詞である事に気づく

洸「総司の奴やっぱり此処に来た事があるのか・・・あのクマの言葉によれば

総司達が此処に来たのは  
まだ最近だな・・・」

くっ！それにしても人が増えたから声が聞きにくい。俺はよく耳を澄ませる。

クマ「分かった！君達こそ此処へ人を入れてるヤツに違いないクマ  
アアッ！！」

花「っざけんなツツーの！俺たちはその犯人を突き止めにきたんだ  
よー！」

そう言つてクマ？に怒鳴る花村

泷「……あの花村って奴、自覚が在るのか分からないが口調に少し楽しさ混じりがある。無意識かも知れんが、この非現実な世界を楽しんでる感があるな

ガキが！人が死んでるんだぞ！総司もなぜ止め無かった！」

俺は花村の緊張感のない感じに怒りを覚える。

その時

泷「（ん？あいつらクマから何か貰ったな。おっと、どつやら移動する様だ。）」  
下の方では総司達が何処かに移動した。

泷「（今、出ていってもいいが……少し気になるな様子を見るか）」

そう言っつて俺は静かに下に下りる。

泷「さてと、あいつらはどつちに、ん？」

俺は床に何か落ちてている事に気づく。

泷「（なんでメガネ？）」



タルタロスの時は美鶴たちが教えてくれたあの時とは状況が違うかな。

おっと！

俺の前方に酒屋らしき場所で立っている総司達を見つけた俺は急いで身を隠した。その時だった

ク「ま・・・待つクマ！

そこにいるクマ！！やっぱり襲って来たクマ！」

そのクマの台詞と同時に  
ワイトも騒ぎ出す

洸「この感じ・・・まさか！」

花「？いるって何が？」

ク・洸「『シャドウ！』」

その言葉と同時に酒屋の扉から仮面をつけた黒いドロドロした物が  
出て来て。

それが丸い球体に口がありその口から長い舌が出ているシャドウー  
ー「『失言のアブルリー』が現れる。

花「うわ！」

総「花村！」

シャドウに吹っ飛ばされる花村。

総「このおお！」

ドガア！

そう叫ぶと総司は手に持っていたゴルフクラブでシャドウを殴る総司だが

『ヒヤアア〜』

シャドウはダメージを受けてる様子がない。

洸「無駄だ総司、ペルソナ能力に覚醒してない者の攻撃はシャドウには効かないぞ」

俺はその様子を離れた場所から様子を見ていた。

洸「だが・・・そろそろ危ないな（花村とクマは戦力外、総司・・・  
お前はペルソナの力には目覚めない様だな）」

そう思い、三人の元へ行こうとした時だった。

ポウン！

花「な、なんだああ！」

洸「！？あれは・・・」

突然、総司の周りを包む様に光があり、その手には一枚のカードがあった

総「ペ・・・ル・・・ソ・・・ナ」

そう呟きそして

手のカードを握り潰す様に握る。

バリイイイン！！！！

カツ！！！！！！！！

総「うああああッ！！！！」

その叫びと共に  
仮面を付け学ランの様な服に大剣を持つペルソナー……『イザナ  
ギ』が現れる

洸「あれが……あいつのペルソナ……」

俺は現在の光景に驚いていた。

そして理解した……イゴールがあいつに頼んだ理由もそしてこの  
事件解決には総司の……弟の力が必要なのだと言つ事を。

総「うおおおおお！」

そして総司はそのまま

ペルソナを使い、まず目の前のシャドウをイザナギが大剣で両断する

ズバアアアア！

バシユウウウ

そして、その音と共に消えるシャドウ

そしてそのまま、目を残ったシャドウに向ける

洸「イザナギ！」その台詞に答えるかのようにイザナギは雷を放つ

『ジオ』

ドオオオオン！

そしてシャドウを全て殲滅した。

洗「・・・総司、お前の  
デビュー戦、カッコ良かったぜ」

俺はイザナギから放たれている光を眺めながら  
そう呟いた。



**我は影、真なる我（前書き）**

お気に入り登録が14件

自分が思ってたよりも多くてビックリです！

## 我は影、真なる我

洸「それにしても、全く心配させやがって……」

俺は総司達から見えない  
位置でそう呟く。

だけど今の俺の顔、多分

ニヤけてるな、何だかんだで弟の成長は嬉しいから……

洸「（だが、総司……

ペルソナを出したからにはもう後戻りは出来ないぞ）」

そう思いながら俺はペルソナを一旦、消した総司達の様子を見る

ク「さっすがセンセイ！」

総「セ……センセイ？」

クマの突然のセンセイ発言に困惑する総司

ク「この世界に入ってこれたのもセンセイの力が、こんな凄い力を  
持っていたなんてオドロキね！な、ヨースケもそう思うだろ？」



えー

ー困った子よねー

突然、何処からか声が聞こえてきた。

洗「(何だ!?この声は・・・人だよな。でも、まるで陰口のような・・・)」

突然の声に警戒する俺

花「何だよこの声・・・

ーッ!おいクマ!

ここは・・・ここににいる者にとっての現実だとか言ってたな、それって・・・ここに迷いこんだ先輩にとっても現実って意味なのか?」

成るほどな・・・此処が

そういう世界ならば、総司達の言う通り彼女がこの世界で迷いこんだなら多分

この声は・・・

花「これが・・・先輩の・・・」

花村はそのまま顔を下に向ける。

洸「・・・殺害された彼女が自分の理想と違っている事に気づきたくないといった所だな」

俺は花村の様子を見ながらそう呟き。

総「とりあえず、中に入るぞ」

何とか場の空気を帰るためか、話を切り替える総司そして酒屋の中に入って行く総司達。

洸「（入口辺りで様子を見るか。慎重にな・・・）」

そう言っって入口の近くまで近く俺

え〜っと、中の様子はつとそして入口の影から中の様子を見る。

『私ずっと花ちゃんの事』

洸「（ん？誰の声だ女性の声みたいだな・・・）」

花「この声・・・先輩!？」

洸「(先輩?と言う事は

この声は亡くなった小西早紀か・・・)」

花「え?って言うか先輩

俺の事!？」

洸「(ふっ、どうやら二人は両想いだった様だな・・・ならばあの花村って奴もある意味被害者か)」

小「うざいと思ってた』

洸「(そうそう、うざい・・・え?)」

花「・・・え?」

小「仲良くしてたのは店長の息子だから都合いいってだけだったの  
に・・・  
勘違いして盛り上がって・・・ほんと うざい』



花？『何、言ってるだよ  
俺はお前だあ！だからお前の事は全部お見通しなんだよ・・・』

洸「（この世界は此処にいる者にとっても現実になるならば・・・  
あのシャドウが花村陽介と言う人物の  
現実だと言う事になるな・・・つまり奴は現在、心の中の本当の自  
分と向き合っていると言っても過言じゃないな・・・）」

そして話しを続ける。

花？『此処に来たのもお前は単にワクワクしたんだ！小西先輩のた  
めにこの世界を調べに来たなんてのは  
ただの口実さ！大好きな  
先輩が死んだつてのにな！』

総「・・・花村」

ク「・・・ヨースケ」

花「ち・・・違う・・・」

やはりか・・・あの花村と言う奴は話す度にその言葉の中に楽しさ  
やワクワクした様な感じの言葉になっていた。





花「あ・・・ああ・・・」

総「！？花村！隠れてろ！」

余りの事に頭が追いつかない花村に総司は指示を出す

洸「（総司、今度のシャドウはさっきのシャドウと違って力押しだ  
けじゃ勝てないぞ・・・）」

俺のそんな思いとは裏腹に総司はシャドウに攻撃を仕掛ける。

総「うおお！」

花？「なんだ？お前・・・目障りなんだよ！！！！  
食らえ！」

『忘却の風！』

シャドウがそう唱えると  
突然、強烈な風が吹き総司を襲う。

総「うわあああ!?!」

その風に吹き飛ばされ床にはいつくばる総司

ク「センセイ!?!」

花「瀬多!」

洗「やはりな・・・ペルソナやシャドウには属性があり、ペルソナ使いは己のペルソナによって弱点属性が変わりその弱点属性の攻撃を受けた場合・・・己へのダメージも大きいがそれは相手も同じ事、上級の

シャドウの中には弱点がない者も多いが・・・基本的には、《火は氷に弱く、氷は火に弱い》と言った様に自分の弱点属性が相手の属性だった場合は相手の弱点属性はこちらの属性となる・・・総司、ここからは

よく考えて戦え。さもないと死ぬぞ・・・」

花? 『しぶといな・・・』

とつとと死ね!?!?!」

『チャージ!』

力を溜めるシャドウ

ク「ガードするクマ! 攻撃がくるクマ!」

総「分かった！」

クマの言葉を聞き相手の攻撃に備える総司

花？『死ねよ！！！！』

『忘却の風！！』

先程より巨大な風を受けたが防御していたのでそこまで被害はなかった

総「ふう助かったよクマ」

ク「お安い御用だクマ

センセイはクマがサポートするクマ！」

洗「（ほう、あのクマそれなりに出来る様だなサポート役がいるば少しは楽になる筈だ）」

ク「センセイ！いまだクマ！」

クマの合図で攻撃態勢に入る総司

総「イザナギ！」

『ジオ！』

ドオオオオン！！！！

花？『ぐわああ！お前えええ！』

クマとの連携で少しずつだがダメージを与えていく二人。

洸「後は、あいつらだけで大丈夫だな、さてと俺は……」

そう言つて後ろを振り向く俺、すると

『ヒヤアア！！』

『ヒヤアア！！』

先程、総司が倒したシャドウの『失言のアブルリー』がいた。しかも大量に

洸「ざつと見て16匹つて

ところか、あれだけの力を持ったシャドウが暴れてるんだ他のシャド

ウが刺激されない訳がないか、だが・・・悪いなこつから先は立入禁止なんでなそれでも入るなら・・・斬るぜ」『ヒヤアア!』

俺の言葉を合図に一匹の

シャドウが襲い掛かってきた。そしてシャドウは舌を大きく振ってその反動を使い舌で攻撃してきたが。

俺はそれをかわして刀で反撃しそのまま両断する

洸「まずは一匹(明彦の拳に比べれば遅いし隙だらけなんだよ!)(」

周りに注意しながら俺はペルソナを呼ぶ

洸「お前らごときに時間は掛けられないんだよ!オシリス!」

『マハジオ!』

オシリスが大剣を翳すとシャドウ達に雷が降り注ぐドオオオオン!!!!!!!!!!

そして、シャドウ達は一瞬にして消滅した。

洗「・・・さてと、あっちはどうなったかな」

そう言っただけは酒屋の中の様子を見ると、シャドウは花村の姿に戻っており、花村と向かい会っていた。

花「お前は・・・やっぱり俺なんだ・・・」

その言葉にシャドウはゆっくりと頷き光るとペルソナー―ジライヤになり花村の手にはカードが舞い降りる。

洗「(シャドウが!?)そしてあれはペルソナ・・・奴もペルソナ能力に覚醒したのか・・・もう少しあいつらを見守るか、だがもしこれからの戦いを見てペルソナをヒーローごっこか何かに使っなら、俺があいつらを叩き潰してでもこの

事件から手を引かせる・・・さて、今日はもう帰るかこのままじゃあいつらと

鉢合わせだしな・・・)」

そう言っただけは元の場所に駆け足で戻る。

そして現在・・・悩み中

洸「どうやって帰ればいいんだ？早くしないとあいつらが来るぞ！」  
盲点だった！入る時は楽だったから帰りも楽だと思ってたのに！ど  
うすれば！そんな事を考えながら悩んでいた時だったとっさに俺  
は手を翳した瞬間・・・

洸「何これ？」

突如、目の前に変な穴が出て来た。何これ！？つか何で俺の手か  
ら出て来たんだ！？  
その時

三人「ーーーー！」

やば！来やがった！こうなりややけた！  
そう思い、俺は目の前の穴の中に入った

洸「・・・此処は？」

俺が目を開けるとそこは俺の部屋だった。  
え？戻った？ヤッター！！俺はテレビに勝った！！！！



そんな事をしながら一時間後・・・俺は机の上で考えていた。

洗「あの穴は一体？それに何で俺が出せたんだ。心当たりがある  
とすれば夢の中で会ったあの『？』が俺に何かしたか？・・・それ  
に花村とか言ったあいつ何でペルソナを・・・」

考えた結果・・・保留

いや、だってわかんないし仕方ないじゃん！

そして現在、俺は机の上でレポートを書いていた。

洗「（今回の事件は多分

前例が無いだろう。だから今回から事件の調査状況とテレビの中で  
起きた事を記す事にした方がいいな、  
それにもしよ俺や総司の身に何か会った時には、このレポートを美  
鶴達に渡して後を託せるしな・・・）」

そう思いながら、レポートを書き留めた俺は何となく携帯を見た。  
すると・・・

洗「メールが三件か・・・（二つはメルマガだな・・・後一つは！  
？・・・お前か）」

メールの贈り主は

『桐条 美鶴』と書かれていた。

俺は中身を見てみると。

久しぶりだな洗夜

元気になっているか？お前が私達の前から姿を消してから、もう二年だ電話をしてもメールを送ってもお前からの返事が返ってこないが番号やアドレスを変えてない点では安心できる。それかー

そこまで見て、俺はメールを削除した。

美鶴は定期的にメールや電話をして来て俺の安否を確かめる。

返事を返した事はないが・・・理由？ 特にはないが強いて言えば何て返せば

いいか、わからないからな美鶴はメールで『二年の事は誰もお前を責めてはいない』とメールが来ていたがメールや電話じゃ相手の心が解らないからな。

だからと言って会う気はない。

どんな顔で会えばいいか解らないから・・・

そして俺は携帯を机において横になる。

洗「もう・・・昔には戻れないんだよ・・・美鶴」

俺の呟きを聞く者は誰もいなかった。

過ぎ行く日々（前書き）

また日常編です

## 過ぎ行く日々

洗「・・・釣れないな」

テレビの中での戦いから

二日たっている、あれから総司とは家で話すが至って普通に過ごしている。

どうやら、俺がいた事には気付いていないようだ。

話しが変わり現在、俺は

近所の川で釣りをしている理由はただ単に気分転換だ

洗「・・・今回の事件の裏にあのテレビの世界が

関係しているのは間違いない、きっと犯人は何らかの方法である世界の事を知り犯行に及んだのだろう。ただ問題は・・・犯人はペルソナ使いなのかどうかだ。ペルソナを使うなら対処も変わる、それにあの花村とか言う奴が何故ペルソナに覚醒したのか問題は山積みだな・・・ハア〜」

などと悩みながら釣りをする俺だったが川の上で浮いている浮き見ながら、俺は昔を思い出す。

洗「(皆の前から、消えてもう二年か・・・なのに

いくら無視しても美鶴から連絡が途絶える事はなかったな。何であいつは俺を

許せる？『あいつ』を皆をそして・・・お前の親父さんを目の前でみすみす死なせてしまった俺を・・・いつそ罵倒された方がマシだった。力が有ったのに守れなかった俺は・・・お前の親父さんを見殺しにしてしまった・・・そんな俺を何故、お前は許せるんだよ美鶴・・・」

そう思っていた時だった。ふっ、と後ろで誰かの気配を感じ、俺はゆっくりと振り向くとそこには紅い和服を着た女性がいた。

洸「君は確か総司のクラスメイトの天城・・・雪子ちゃんだったね」

雪「！・・・はい一度しかお会いしてないのに覚えててくれたんですか？」

名前を覚えていたのが、そんなに意外なのか少し驚く雪子ちゃん

洸「弟の友達だからね・・・ところでこんな所で何してるの？そんなにおめかししちゃって」

ちよつと軽い感じで聞く俺

雪「ああ・・・これですか私の家、旅館やってるんです。だから家の手伝いとかでよく着ているんです」

へえ、病弱なイメージから一辺して大和撫子じゃないか……

雪「実は今もお使いの帰りだったんですが……瀬多君のお兄さんが釣りをしているのが見えてその……気になっちゃって、すいません邪魔でしたよね」

いやいや、別に謝る事じゃないし……それに何か

この子、無理してる感じがするんだよね、顔には出さないし誰にも相談しないで自分に言い聞かせる様に

無理をするそんな感じがして美鶴と似てるんだよね……あいつも一人で悩んでたしほっとけないんだ。

似てる言えばあの花村って奴も順平と何処か似てる感じするな。

洸「別に邪魔じゃないさ

ただ、もしまだ時間があるなら、少し話し相手になってくれないかい？学校での総司の様子も知りたいしさ」

雪「え？時間は大丈夫ですけど……いいんですか？」

少し遠慮がちな雪子ちゃんまあ仕方ないか

洸「いいよ、頼んでるのはこっちだしさ」

そう言つて、折りたたみ式のイスを出す俺  
え？何処にあつたのかつて？ いやいや釣りをするならイスはいる  
でしょ。

二つあるのは偶然！考えたら負けだ。

洸「座りなよ」

雪「ありがとうございます」

そう言つて座る雪子ちゃん

洸「・・・」

雪「・・・」

話しが無いし、空気も重いな・・・仕方ないことは

洸「気のせいだったらすまないけど、もしかして悩みがあるんじゃないかい？」

雪「え！その・・・別に・・・悩みって程じゃ・・・」

・・・ハアゝ総司といい

この子といい、近頃の奴は相談すると言つ事を知らないのか・・・  
俺、二十歳なのに爺くさいな

洸「別に遠慮する事じゃないさ。解決は出来ないかも知れないが話しを聞く事は出来る」

・・・なんか恥ずいな

雪「えつと・・・あの・・・私・・・生まれも育ちもずっとこの稲羽の町なん・・・です」

覚悟を決めたのか話しだす雪子ちゃん

雪「それに私の家の旅館って昔から代々続く高級温泉宿なんです・・・そして私はその一人娘・・・」

・・・成る程な

雪「私のお母さんはその旅館の女将だから私も小さい頃から女将修行とかさせられてましたし・・・だからずっとこれからこの町で生きていくんだって思っちゃうんです」

洸「・・・」



雪「でも！……私、この町が……好きだし、お母さんや旅館の人達も優しい……から」

……美鶴と似過ぎだ。

女将の娘・桐条の令嬢

母親や旅館の人達の為に

女将になる天城 雪子

親父さんの為にペルソナ使いになった桐条 美鶴

雪「でも……たまに思っちゃうんですよね。誰か私をこの町から連れ出してって……」

洸「……そうか」

随分と溜め込んでたんだな

雪「そう思うと……虚しくなるんですよね……自分の将来を既に決められてるそんなのは嫌だ。自分の将来は自分で決めたいって……  
・ははは、変ですよ

私、恵まれてるのに……こんな事……思っつのは

洸「……いいんじゃないかい」

雪「……え？」

俺の言葉に驚いた様子の  
雪子ちゃん

洸「人つてのはさ・・・  
やりたい事何て時が経つにつれて変わるもんなんだよ・・・だから  
さ、やりたい事があつたらその度に挑戦した方がいいんだよ後々、  
後悔しないようにな・・・」

雪「・・・」

今度は雪子ちゃんが黙って俺の言葉を聞いている

洸「それにさ、多分・・・雪子ちゃんさ結論は既に出てるんだと思  
うんだよね、でも・・・まだその結論を受け入れられないんだと思  
うんだ」

雪「受け入れられない・・・」

洸「ま！これはあくまで

一人の人間の意見だよ参考にするのもよし！忘れるのもよし！後は  
君が決める事だ。あつ！最後にもう一つ」

雪「？」

洸「誰かに相談する事は  
いい事はだぞ、ところで時間はいいのかい？」

雪「え？・・・あ！えつと・・・もう行かないと！すみません私もう  
行きます」

そう言つと雪子ちゃんは  
駆け足で移動する。

洸「気をつけてかえりなよ」

そう言つて俺は道具を片付けて帰る準備をする  
すると

雪「お兄さーん！今日はありがとうございました！私！友達とか  
に相談したりしてみます！」

そう言つて、ふり向いて

お礼を言つ雪子ちゃんの姿があつた。

そして俺も手を振る

と言つか今日の出来事で彼女の印象が凄く変わったな

そして現在、俺は道具を  
持ちながら家に帰っていた

洸「(・・・なんだかんだであんな事言ってしまったが、今思えば  
美鶴からのメールの中に相談事とかあったのかも知れないな・・・  
あいつ、ちゃんと誰かに相談とかしてんのか？アイギスと千鳥ちゃ  
んは話しがずれそうだな、明彦と順平は例外・・・妥当なのは、ゆ  
かりと風花だな、だがあいつが相談何てする柄かよ・・・)」

そう思うと何故か、俺は  
携帯を出していた。

「(・・・どうする？気になってメールを送ろうとしたが何て送る  
？二年間ずつとあいつ等から逃げていたし連絡も無視していた。  
今更何て言えはいいんだ！だが・・・って言うか何で！俺は  
美鶴の事をこんなに気になってんだ！！・・・くそ！もうやけだ！  
無難に元気か？でいいか)」

何やってんだ・・・俺は

この間、部屋で言った。

『もう、昔には戻れないんだよ・・・美鶴』あの台詞が馬鹿見たい  
じゃないか！！そう悩みながら俺は帰宅してしまった。

余りの不審な行動に菜々子ちゃんからは心配されて、総司からは人  
生相談を何故か受けた。

美鶴視点

美「（ん？メールか・・・一体誰から・・・！？洗夜・・・今までメールや電話をかけても、連絡を返さなかったのに・・・何かあったのか・・・）」

そう思い、不安になりながら私はメールを確認するがその内容を見たら、顔に笑みが浮かぶ。

美「全く・・・いくら連絡をしても返事を返さなかったのに・・・突然こんな返事を返してくるとはな」

にしてもこの内容は・・・それはこちらの台詞としか言えないぞ。

美「だが、安心したぞ洗夜お前は変わりはないようだな・・・（今度はメールではなく直接会いに来い皆

お前の事を待っているんだぞ勿論、私もだ・・・）」

そう言って携帯を置く美鶴そして開いた携帯から文章が見えた

お前は一人じゃない

だからたまには誰かに相談しろ

美鶴視点

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2842z/>

---

ペルソナ4～迷いの先に光あれ～

2011年12月16日00時49分発行